

下野市立石橋中学校

1 学校課題

学び合いの授業を通じた確かな学力の育成～主体的・対話的で深い学びを通して～
(学校課題設定の理由)

本校では、学び合いの授業について研究を進め5年目となる。授業中、生徒同士が課題解決に向けて、自分の意見や考えを他の意見と比較しながら練り上げていくという活動が中心となってきたことが、4年間の成果として挙げられる。しかし、「学び合い」の授業が浸透する中で、形だけの「学び合い」になっていないかということを繰り返し振り返る必要がある。生徒一人一人の学びを保証するために、確かな学力を育成する授業のあり方の本質をとらえることが大切と考え今年度の課題とした。さらに、学校の実態として自己肯定感が低く、自分の意見を言えない生徒が多いため、「学び合い」を支える生徒の「対話力」を育成する必要があると考えた。学級内で生徒が安心して自分の意見を発言できる雰囲気醸成、また、生徒のみならず教師も互いに学び合う学校を目指していきたい。

2 研究計画

(1) 研究仮説

- ① 「アサーショントレーニング (アサトレ)」活動を取り入れることは、生徒一人一人の自己肯定感が高まり、主体的に友人や教師と対話する事ができるようになることで、学びに向かう集団づくりに効果的ではないか。
- ② 教師が同僚性を発揮し「学び合い」を取り入れた授業の公開や授業研究をすることによって、振り返りを生かし授業が変わるのではないか。

(2) 研究の方法

- ① 「アサトレ」を全校体制で実施し、生徒の「対話力」の向上を図り、効果を検証する。
- ② 授業を客観的にみる指標として、生徒による授業アンケートを年間2回実施し検証する。
- ③ 教師が互いに授業を見せ合い、互いの考えを交換することを通して、教師の協働の意識 (同僚性) を高める。
- ④ 授業力の向上を図るための最新理論等は、外部講師 (宇大教授等) から全職員に示唆を頂く。

3 研究内容

(1) 公開授業および授業研究会についての共通理解

- (1) 授業実践上での共通理解事項
 - ・「書くこと」の定着を図る授業展開
 - ・「めあて」と「振り返り」を適切に位置付けた授業展開
- (2) グループ編成 基本的考え方
 - ・多様な指導方法の共有が可能となるように年齢及び教科の枠を外した4人グループ編成を意図的に編成して班内の全員の授業を参観する。年間で一人一回授業を公開する。
- (3) 授業を見る視点を明確にした「授業デザイン」を作成しする。
- (4) 授業研究会は公開授業の当日帰りの会直後 15 分間実施する。

(2) アサーショントレーニングについて

- ねらい**
- ① 自分の思いを相手に伝え、相手の思いを聴く活動を繰り返し実施することで自尊心を高める。
 - ② 全校で実施することで生徒のコミュニケーション能力を高める

- 方法**
- ① 週2回朝の会の前に
全校一斉放送で実施
 - ② 男女ペアで聞く・話す人
30秒ずつ交代で話す
 - ③ 毎回テーマを変える



(3) 授業アンケートについて

授業改善の指標を定めて、その有効性を「見える化」した。生徒全員に対してアンケートを実施して、生徒の理解がどのように変化したかを数値化し、実践の効果を評価できるようにした。教師の主観で判断するのではなく、客観的データを用いた。指標のもとになるアンケート作りに関しては、5因子「授業マネジメント」「基礎力アップ」「授業スキル」「アクティブラーニング」「アサーショントレーニング」として22個の質問を具体化した。回答には四段階評価を用いて、合計で効果を測定した。一人一公開授業の前後半の取組の効果を比較できるようにした。

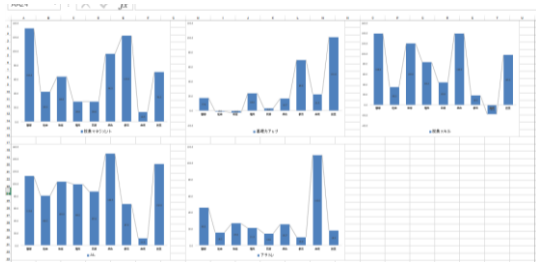
【ポイント】
全校生徒授業アンケート実施
指標を定めて有効性を「見える化」

4 本年度の成果と課題

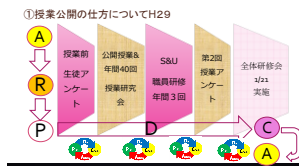
(1) 成果

- ① 教師の授業力向上に向けた取組が活性化し、活動そのものの質が高まった
 学校全体として取り組んだ公開授業やプチ授業研究会において、異教科・異学年を意識して班を構成し組織化した。
- ② 質的・量的なデータに基づいた多面的な生徒の実態把握ができた
 多忙な学校現場において生徒の授業アンケートをマークシート方式で作成し、回答をスキャナーで読み取ることでデータ処理が簡潔になった。大規模学校でも生徒の意識調査がであることが分かった。
- ③ クロス表を活用して校内授業研究会を振り返り、次年度の課題を洗い出した
 年間40回にわたる授業研究会で顕在化した成果を最終的に学校全体で共有するために、班ごとにクロス表を活用して再度授業について省察をした。具体的には、ファシリテーターである研究主任が、クロス表から難易度等を基に優先順位を検討し、次の学習指導計画に反映させる。
- ④ 授業評価（生徒）では5因子全てにおいて結果が大幅に伸びた
 特にアクティブラーニングと授業マネジメントの項目に関しては、ほぼ全教科で大きな伸びを示した。
- ⑤ R-PDCAサイクルが有効に働いた
 生徒の視点や思いも多面的に把握した結果をもとに授業を計画、実践、評価をして、改善する。（PDPDの繰り返しになりがちな学校現場であるからこそ意義が深い）

授業アンケート5因子



R-PDCA サイクル



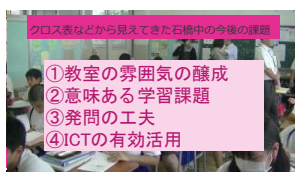
クロス表

クロス表 取り組みやすく成果も上がる

高	難	難
高	高	高
中	中	中
低	低	低

(2) 課題

- アサトレ ①学級担任の関わり方の効果の差、話せない話すことが苦手な生徒への支援体制の構築。
 ②30秒の一方的な話から双方向の対話的な実践へとレベルアップする。
- 授業研究会①授業研究会の冬場の時間設定が難しい。（下校時刻・勤務時間との関連）
 ②新学習指導要領に向けて授業力向上の必要性を全教員が共有すること。
- その他 次年度は「小中一貫教育」における効果的な連携のあり方を模索し実践する。



クロス表からの今後の課題



授業風景 1年



2年



3年